

## 東京ジュニア体重別選手権（女子）講評

梅雨の晴れ間の7月11日、令和3年度東京ジュニア体重別選手権（女子）が講道館大道場で開催された。当然無観客、全ての大会参加者への健康記録表の提出義務、手指・畳の消毒など、万全な感染対策を講じた上での実施である。合わせて、大道場の人数制限や、4試合場が使用できる大道場を3試合場に限定し、1試合場を次試合選手の待機場所にするなど、密を避ける対策もしっかりと講じられていた。試合は、各階級ともに熱戦が繰り広げられ、大声援や大きな声でのコーチングがない比較的静かな大道場も選手たちの熱気であふれていた。経験年数や練習環境を考えると大学生有利であることは間違いないが、48 kg級や63 kg級で全日本ジュニア選手権大会への出場権を獲得するなど、高校生の活躍も数多く見受けられた。どの試合もハイレベルで、この大会から将来の女子柔道界を担う選手が数多く輩出されることを感じさせてくれた。

大会中、試合を観戦しながらふと感じたことがある。それはこのような静かな試合場で試合が実施されていることに慣れている自分がいることである。新型コロナウイルス感染症の流行前、試合場といえば観客席から大きな声援や歓声が飛び、非常に賑やかであった。選手の息遣いや、畳を擦る足音が聞こえる静かな試合場も悪くないが、選手たちは声援を受けることで大きな力を発揮できることもあるだろう。また、選手の保護者も子どもたちの試合を間近で観戦し声援を送りたいはずだ。今月開幕する東京オリンピックの柔道競技も無観客の実施となってしまった。残念ではあるが、出場選手の素晴らしい活躍により、日本に元気を与えてくれることを期待したい。

【広報委員長 赤澤良太】